



むかしむかし ほし
昔々、お星さまの
かがや よぞら はなし
輝く 夜空でのお話。

ねしず ちじょう む
寝静まった 地上に 向かって

ほし てん
キラキラ星が、天から
あたた かがや はな
暖かい 輝きを 放っていた

それなのに、はなばなしさの
なか ちい ほし
中で 小さな 星が
な
泣いている。



ぼくの ^{ひかり}光って、
そんなに ^{あか}明るくないなあ。
ぼくのことを ^み見える
^{ひと}人なんて、いるの
かしら？

^{うちゅう}「宇宙で ^{いちばん}一番 ^{ちい}小さな ^{ひかり}光、
それが ^{ボク}ボク。

^{ちじょう}地上から ^{ぼく}ぼくの ^{ちつちやな}ちつちやな ^{ひかり}光が
^み見える ^{ひと}人なんて、いるのかな？

^{まわ}周りの ^{りつぱな}りつぱな ^{ほし}星たちは ^{みんな}みんな、
それぞれの ^{ばしょ}場所で
がんばってるのにな。

みんなが ^{あか}あんなに ^{あか}明るくて、
ぼくの ^{かお}顔が ^み見える ^{ひと}人なんか、
いないよね？」



あ～あ。

だれも、わたしが
ねす
寝過ごしたのに
き
気づかなかった
なんて。

すると、空の 向こうから
てんし
天使の 声が する

かな
悲しそうな 声で ささやいてる。

「わたしも 小さいの。」 幼い
てんし
天使が 泣きながら 言った。

「わたし、寝過ごしちゃったのに、
わたしの 声が 足りないことに
だれも 気づかなかったのよ。」



おさな てんし
幼い 天使が ぐつすりと

ねむっていたころ、

おびただしい かずの てんし
数 の 天使は

よどお うた
夜通し 歌っていた。

かれ うた
彼らが 歌っていたのは、

てんごく よろこ み うた
天国の 喜びに 満ちた 歌。

だけど、ちっちゃな こえ
声 が

た
足りないのに だれも

き
気づかなかったよう。

はるか かなたの
地上ちじょうからも、
泣きべそを かく
声こえが 聞こえてくる

それは なみだくん君。
ちっぽけな ちっぽけな
なみだくん君！

「ぼくは、だれにも
愛あいされず、知しられも
しない、たった
ひとつぶの なみだ。

名なも なく、たった
ひとりで ひっそりと
お 落ちてだけ。



ぼくが ものがた 物語るのは、
悲かなしみや きずついた
気きもち、心こころの 痛いたみ。

それは、人ひとが 落おち込こみ、
愛あいする 人ひとたちが
別わかれなくては
いけときない時。

だけど、ぼくは それ
以上いじょうの ことが したい。
幸しあわせを ものがた 物語れたら、
最さいこう高たかなものに。

みんなに よろこ 喜よろこびを
信つたえられたら
いいのに！」それが、
なみだくん君の ねが 願ねがい。

ホタルも、みんなに
かな
悲しみを もらした。

「ぼくには ^{なん}何の
とりえも ない。ただの
ちっぽけな ^{むし}虫だもの。

ちょうちょには ^{いろ}きれいな
^{ゆうが}色と ^{むし}優雅さがある。

だけど、ぼくは ^{なん}ただ
^{とまわ}飛び回るだけで、^{なん}何の
^{よろこ}喜びも もたらして
いない。



^{とり}鳥だったらなあ。

それか、すてきな
^{かお}香りの ^{いろ}する
^{はな}花だったら
よかったのに。

そうすれば、いつだって
その ^{うつく}美しさを
^ふ振りまくのになあ。

だけど、ぼくには ^{いろ}色も
^{かお}香りも ない。ただの
つまらない ^{むし}虫だもの。

こんなに ^{じみ}地味じゃ、
^{まんぞく}満足できるわけ
ないよね。」



てんごく かみさま あいじょうぶか
天国では、神様が愛情深く
みみ
耳をかたむけておられた

こころ いと
心から愛しい、これらの
ちい もの かな
小さな者たちの悲しい
き
なげきを聞いておられた。

ちい もの
「小さき者たちよ、いったい
なに
何をなげいているのかい？」
こえ かみさま
やさしい声で神様が
たずねた。

「わたしはおまえたちを、
こころ
わが心のままに、カンペキに
つく
造ったはずだがね。」



ちい ほし かがや
「小さな星よ、輝いてごらん。

おさな ひつじか しょうねん
幼い羊飼いの少年のためにね。

かれ こころ よろこ
彼は、心に喜びをもたらし

くれる、お前の小さな輝きを

さがもと
探し求めているのだよ。」

かみさま ちい ほし
神様は小さな星にキスすると、

おさな ひつじか かがや
幼い羊飼いにその輝きを

み
見せた。

そら み あ しょうねん こころ
空を見上げた少年の心は、

よろこ み
喜びで満ちあふれた。



ちじょう ほ くさ
地上では、干し草の つまった
か ば あか
飼い葉おけに 赤ちゃんが
ねている

かみさま おさな てんし む
神様は 幼い 天使に 向かって
やさしく 言った

いと てんし
「愛しい 天使よ。おまえには
こころ 心地よい こもりうた ようい
心地よい 子守歌を 用意して
あるんだよ。

こ な
わが子が 泣かぬように、それを
うた
歌っておくれ。」



「そして、^{いと}愛しいひとしずくの
なみだよ、^{きみ}君は おどろくべき
^{こうふん}興奮を ^{えんしゅつ}演出することになる

^{きみ}君を ^め目から ^{あか}こぼす 赤んぼうの
^{ははおや}母親にね。

^{かのじょ}彼女の ほおを ^{つた}伝い、^{かのじょ}彼女の
ほほえみに キスをするんだ。

^{あい}愛する者よ、それこそ、^{きみ}君の
^{ばしょ}場所ではないか。」



「それは そうと、わたしの
ホタル^{くん}君は どこだい？」
神様^{かみさま}は その夜^{よる} たずねられた。

「どうか、今夜^{こんや} 地上^{ちじょう}に 生まれた^う
ばかりの わが子^このために
舞^まってくれないかな。

きらめきを 放^{はな}つんだ。暗闇^{くらやみ}は 君^{きみ}を
ますます 輝^{かがや}かせて くれるだろう。

ホタルよ、わが愛^{あい}する 子^このために、
再^{ふたた}び くるくる 回^{まわ}っておくれ。」



そういうことで、ホタルは ^ま舞い、
天使は ^{てんし}やさしく ^{うた}歌い、

^{ほし}星は ^{あか}明るく ^{かがや}輝き、なみだの
^おしずくも ^お落ちた。

みんな ^{ちい}小さな ^{もの}者たちばかりだけど、
^{かくじ}各自が ^{かみさま}神様の ^{かんぺきな}カンペキな
^{けいかく}ご計画に ^そ沿って ^{むかしむかし}昔々の
ある ^{クリスマスに、その}クリスマスに、その
^{やくわり}役割を ^は果たしたんだ。

文：カチューシャ・ジュスティ 絵：アグネス・リメア
彩色：アルビ デザイン：松岡陽子
Copyright © 2010年、ファミリーインターナショナル
"As Little Ones" --Japanese